

私の研究分野と職業倫理：一国際政治学研究者にとってのイラク戦争

上智大学大学院法学研究科博士後期課程四年 C0041002

小林誉明

I. 要旨

私の専攻は国際政治学であり、特に発展途上国における飢餓や暴力の問題および南北問題が関心領域である。2003年に勃発したイラク戦争は、国際政治研究者としての私の職業倫理を根底から揺るがした。既成の事象を観察対象とする研究者として、目の前で発生しようとしている人道的危機に対してどのように行動すべきか苦悩した。それは冷静な研究者としての自分と感情をもった一人の人間としての自分との葛藤であり、国際政治研究者としての職業倫理の限界線を模索せざるを得ない状況に追い込まれたことを意味していた。もともと湾岸戦争に触発され、戦争発生原因の研究を通じて平和に貢献したいとの決意から研究者を志した私にとっては、過去に目を向けた研究者であることと、未来に目を向けた行動家であることが両立しないという事実、身を引き裂かれる思いがした。しかし、研究者仲間や先輩、先生達との意見交換を通じて、本人の努力次第で、研究者であることと一人の人間であることは両立しえることを学び、それを具現している研究者が多数存在していること、そしてそのスタイルは様々であることを知った。むしろ研究者であるからこそできること、研究者である私にしかできないことがたくさんあるということに気付かされた。研究者が専門の職業人である所以は、問題が発生してから問題に働きかけるのではなく、常日頃から研究対象への不断の関心を寄せている点にある。その意味で、戦争発生直前まで何らの関心も対応もできなかった私の、国際政治研究者としての倫理的責任は特に重い。現在の自分にできることと、研究者としてやるべきと思われることとのギャップはまだ大きい。そして、研究者であることと人間であることとの距離はまだまだ遠い。研究者としての職業倫理とは何かという答えはまだ見つかっていない。しかし、そのような乖離が存在していることを意識しつつづけること、とことん悩み抜くことが、一つの答えになるのではないかと思う。

II. 本論

1. 原点への回帰

2003年3月20日午前10時過ぎ、イラク戦争開戦。その時、私は虎ノ門のアメリカ大使館前にいた。戦争を止めることができなかつた悔しさに涙が溢れてきた。私は、正義の名のもとに国家が無実の人々の命を奪うことの理不尽さを許容することができない。安全

保障上の脅威と人間の死を天秤にかける発想には、人の死に対する想像力の欠如を感じる。国際政治学を専攻する私は、研究の客観性を確保するために、現実の政治からは意識的に距離をおいてきた。しかし、戦争開始が秒読み段階に入るに及んで、なんらかの抗議行動を起こさずにはいられなかった。そんな想いを胸に開戦前夜、衝動的にアメリカ大使館に向かったのであった。そして、生まれてはじめての座り込み・デモ行進という街頭活動を行った。戦争遂行者の無責任さへの怒り、戦争は不可避との論調を作り上げるマスコミや積極論者などへの怒りなど様々な想いが交錯していた。しかし、開戦への流れをくい止めることができない無力な自分に最も腹がたった。デジャブ？これは、いつかどこで感じたことがある感覚である。

突如、頭の中に蘇ったのは、1991年1月17日、湾岸戦争勃発時の情景である。それは忘れもしない高校三年生の冬、大学入試センター試験直後のことであった。冷戦時代に生まれ、実際の戦争というものが過去の遺物だと思っていた当時の自分には、本物の戦争が目の前で繰り広げられているという事実を容易に受け入れることができなかった。当時の私には戦争の是非を判断する基準も知識もなく、ただただ、ショックを受けていただけであった。日本全国において反戦デモが繰り広げられたが、自分は受験生であったため、集中力が散漫にならないように戦争について考えることを意識的に避けた。その代わりに、大学に入ったら、戦争が何故発生したのか、どうやったら戦争の無い世界になるのかを考えようと誓った。だからこそ、国際関係論や国際政治を勉強できる環境が整っていた上智大学を選び、国際政治学のゼミを取り、大学院へ進み博士課程の現在に至るのである。意識の上ではすっかり忘れていたが、現在の研究者としての自分の原点は12年前の湾岸戦争にあったのである。曲がりなりにも国際法を勉強し、国際政治のメカニズムも勉強したつもりである。第二次大戦後、武力行使を伴わない国際秩序が国連を中心とした多国間の努力で形成されてきたことも勉強した。高校生の時と違って、この戦争が正しいか間違っているかの判断は自らできるようになっていた。しかし、その流れを押し留める力にはなかった。いままで習ってきた事柄の信憑性が音を立てて崩れてゆくようだった。結局は力が正義であるということなのだろうか。この12年間を冒涇されたような気分になり、自分の存在意義やプライドを根こそぎなぎ倒されてしまった。湾岸戦争に触発されて国際政治学の道を目指した自分のアイデンティティのよりどころが喪失してしまった。同じ過ちが再び目の前で起ころうとしているのを、ただ傍観するしかないのだ。自分はこの12年間一体何をやっていたのだろうか。あのとき、将来、戦争がおこるのを防ごうと誓って、この道に進んだのではなかったのか？あのときは、「高校生だし力も知恵も無いから、今回は仕方ないや」と言い訳したけど、今でも何一つ変わっていないではないか。戦争を防ぐことができない自分の無力さを感じて、戦争の無い世の中にする方法を勉強しようとの決意で博士課程まで来た。それでもやっぱり12年前と同じく無力だったのである。

2. 研究者としての私と人間としての私との葛藤

湾岸戦争が始まる以前の私は、ジャーナリストになるのが夢であった。しかし、目の前で多くの人が死んで行くなかで、その様子を実況中継する行為の意義に疑問を感じはじめた。そして、問題の直接的解決に対するメディアの無力さを知った。それは報道関係者多数が見守るなかで発生した「豊田商事会長刺殺事件」や、ケビン・カクタ氏による「ハゲワシと少女」の写真（ピューリツア賞）を見たときに受けた衝撃と同様のものではなかった。すなわち、死にゆく人を目の前にして、ジャーナリストがその事実をただ報道することが職業倫理的に正しいことなのかという疑問である。確かに、客観的な傍観者としてカメラを回し続けることにより、ジャーナリストという職業人としては満足がいく画を撮ることができるであろう。しかし、彼ら（彼女ら）は、職業人である前に、一人の人間ではないのか？ジャーナリズムの問題解決能力への疑問は「ゲームのような戦争」と形容された湾岸戦争を目にして決定的となった。それゆえ、私は、戦争という悲劇を事前に防ぐべく、問題の根本的構造を特定する研究者の途を選んだのであった。しかし、社会学者として観察者本人による社会事象への参与を自ら制約する姿勢を続けた結果、戦争・内戦・飢饉などの複合的人道危機に関する研究をしているにも関わらず、いつのまにか研究のための研究になっていたようである。分析手法として統計的手法を使う私にとっては1000人の死者という数は、ただの数値以上の意味を持ち得なかった。今回のイラク戦争に日本政府が支持を表明したことによって、はじめて研究対象としての戦争を、自分自身の問題として認識するようになった。ジャーナリストとしての自分が、一人の人間としての自分かというジレンマから逃れようとして、そのようなジレンマからは無縁と思われる研究者への途を志したにも関わらず、やはり研究者という職業であっても、同様のジレンマからは逃れることはできないのであった。博士課程四年にして始めて、自分自身が研究者としての職業倫理に関する深刻なジレンマに直面したことになる。すなわち、研究者としての自分と、一人の人間としての私のどちらが優先されるべきかという選択肢である。国際政治学研究者の視点からイラク戦争を見ると、新たな戦争の事例が一つ増え、研究対象が増えたことを意味する。しかも分析に値する「おもしろいケース」である可能性がある。イラク戦争の開戦への政治的プロセスを研究することにより、次の戦争を予防するための知見を得ることもできるかもしれない。しかし、現実目の前で、多数の人々が戦争の犠牲者になろうとしている時に、研究者として割り切ることは私にはできなかった。国際政治学という研究領域における主要な分析対象である戦争が、実際にリアルタイムで発生している最中に、冷静でいることができなかった。会社を退職してアメリカ大使館前で2ヶ月間にも渡り、寝泊りしながら抗議の意志を示し続けている二十歳前後の若者たちをみるにつけ、どちらつかずの自分に後ろめたさも感じた。当時、私は、博士論文提出締め切りを半年後に控えており、長期間の座り込みをしている物理的時間はなかった。戦争の早期終結を求める運動に本腰を入れるのであれば、研究を中断するか研究者をやめて活動家になったほうが直接的な効果は大きいであろう。他方、研究者として短期の事象とは無関係に研

究を黙々と続けることも一つの選択肢であろう。進行中の研究を貫徹するためには、研究者を志した原点である反戦活動を控えねばならず、逆に、反戦活動を貫徹すれば研究自体を中断せねばならないというジレンマに直面した。自分の心に素直になれば、やはり自分は研究者である前に人間でありたいと思う。人間であることを捨てて研究に没頭する姿勢を許容することはできなかった。しかしその選択は明らかに研究者としてのキャリアにプラスにはならないであろうと推測された。どちらの途をとればいいのか、私は悩んだ。

私以外の研究者はどのように感じているのかを知りたかった。しかし戦争に関する話題は研究室でも沸き起こってはいなかった。皆、淡々といつもどおりの研究に没頭していた。東京では毎週のように5万人規模のデモ行進が代々木公園、芝公園、日比谷公園等を中心として行われ、全国に波及しているにも関わらず、テレビや新聞での扱いはものすごく小さなものであった。上智大学から歩いても僅かな距離のアメリカ大使館前や国会議事堂前、首相官邸前は厳重な警備が為され、機動隊との衝突により複数の検挙者が出ているなかでも、大学に戻れば日常の平穏が確保されているというギャップに、違和感を禁じえなかった。私の怒りの矛先は、人々の無関心さに向かった。研究者仲間や先生に自分の悩みをぶつけると同時に、なぜそんなに冷静でいられるのかを質問し、自分が現場で見てきたことを話した。

3. 両立の模索

多数の人との会話を通じてわかったことは、冷静に研究に没頭しているかのように外観的には見える研究者が必ずしも内面的な苦悩を抱えて無いわけではないという(極当たり前の)事実である。ケビン・カーターが、ハゲタカに狙われている少女の姿に、泣きながらシャッターを切ったように、慟哭を堪えながら分析に没頭している研究者がたくさんいるということを知った。そして、それぞれの立場で、それぞれの闘い方をしているのである。私は、人間としての自分と研究者としての自分との二者択一を選びかねていたが、両者は必ずしも排他的関係にあるのではないということがわかってきた。人間としての自分が信じる特定の価値にコミットしつつも、客観性を維持した研究を続けることは、不可能ではないということがわかってきた。研究への没頭も一つの路であり、活動への没頭も一つの路であるが、第三の路もあるのである。そして、両者の両立こそが、研究者としての視点から戦争などの問題に対してアプローチすることを決めた私の目指すべき途であるということに気付かされた。研究者という職業を選んだからには、研究に基軸を置きつつ、研究者にしかできないことをやるべきと思う。特定の価値へのコミットを深層に秘めつつ客観的な研究をすること、「暖かい心とクールな頭脳」が今こそ求められているのではないだろうか。両立は、非常に困難であろう。しかし、価値へのコミットがない研究は無意味であるし、価値実現に直結しないからといって研究を放棄することは、逃げに過ぎない。客観的な研究を続ける一方で、全く別の領域において人間としての自分を表現する

ことでバランスを取っている研究者もいる。客観的な研究を突き詰めることが、人間としての自分の価値実現に繋がる研究もある¹。例えば、アメリカのある現実主義（リアリズム）の国際政治学者は、国家主権を重視するリアリズムゆえにイラク戦争への反対を表明していた。本当の緻密な研究をしている研究者は流れに流されることなく研究成果に一貫する姿勢を貫いている。

そして、そのスタイルは様々であってよいのではないだろうかということがわかってきた。どのような研究スタイルを取るかは、優劣の問題ではないのである。自分がどのようなスタイルの研究者になるべきなのかについての結論はまだでない。行動と研究とのどの程度のバランスが職業倫理という点で適切なのかは未だに答えはでない。問題意識をもつことが大事であり、実際に行動に移すかどうかは様々なスタイルが有り得ると思われるのである。

4. 研究者としての私にできること

イラク戦争への関わりを通じて、問題意識をもち続けている限り、研究を続けている自分にしかできないことがあるということに気付かされた。研究者仲間の友人からは、デモに参加している私に対して、「おまえには、もっと他にやることがあるはずだ」という指摘を受けた。反戦デモに参加している最中に、「Sophia University」というウッペンを付けた上智大学国際関係研究所の集団に偶然出会った。彼らはデモの参加者へのアンケートによる国際比較プロジェクトを実施していた。たしかにこのような方法を通じて何らかのアピールをすることはできる。冒頭で、12年前の自分との代わり映えの無さを述べたが、様々な人との意見交換の中で、12年前の自分との違いに気付いた。確かに自分の力は12年経った今でもあの時と変わらない。でも、大きな違いがある。今の自分には、若干の知識がある。想いを共有できるたくさんの仲間がいる。そしてもしかしたら力を結集できるかもしれないわずかな人脈もある。その予感、現場に行けば行くほど強くなった。確かにデモでは何も変わらないのかもしれない。しかし、「ここにいること自体に意義がある」というのは、多くの人の共通の感覚のようだ。自分が強烈に反省したのは、なぜもっと早く動かなかったのかということである。最初から「何もできるはずはない」と諦めていた自分が恥ずかしい。「なんでいままで、何もしなかったのだろう」ということに気付いたのである。開戦の12時間前に、こんなところに来て騒いでも、自己満足の域をでない。もっとずっと前に、できることはあったのではないか。そのオプションを検討しなかった自分を恥じた。自分には自分なりにできることがあった。あんな人脈やこんなリソースもあったのではないか。その後、国際緊急援助隊（JMTDR）やNGOスタッフとして医療支援にあたっている専門家の意見をヒヤリングしたり、昨年補欠選挙で衆議院議員となった大

¹ ただし、客観と主観との混同を肯定するものではない。また、研究結果を自分のコミットする価値に沿うように捻じ曲げることもない。

学院国際政治学ゼミ出身の先輩の力を借りて、衆議院院内集会を行った。

これらの活動は一定の成果を挙げたとは思ふものの、それでも多くの点で気付かされることがあった。確かに、問題意識をもち開戦前夜から抗議活動やアドボカシー活動を実行に移したこと自体は、私にとって大きな進歩であり得るものも大きかった。しかし、現に起こってしまった戦争に対して、起こってからなんらかの対策を考えても遅いということである。起こりそうな戦争への漠然とした不安を抱えながらも、実際に行動に移したのは開戦前夜であった。しかし、議員会館の前には、去年から座りこみをしている人もいたのである。私が研究者であるということは本来、その道の専門家であり、その他多数の人やマスメディアよりも早く問題の把握ができていなければ存在意義がないであろう。日ごろから情報を張り巡らし考え続けることが、その道のプロのやるべき仕事であろう。研究者や実務家が参加する、あるメーリングリストにおいて、「今回の戦争を目の当たりにして、自分に何ができるか自問自答しました。」という趣旨の発言をしたところ、「戦争が起きなくても、私たちが何をすべきか自問しただろうか？」という問いかけを返された。衆目の関心とは無関係に、常に監視を続け警告を発することも研究者の重要な役割であることを考えさせられた。

また、当初私は、戦争が開始されてしまった事実を、アメリカ政府、日本政府、マスメディアなどの問題として受け止めていた。しかし、私に不足していたのは、誰かを非難するのではなく、自分にできることを考えるという視点であった。研究内容に価値中立を要請される社会科学の研究者という制約はあったとしても、「今回の戦争」への是非はともかくとして、日ごろから問題意識をもつものとして提案できる点はたくさんあったはずである。

5. おわりに

私はいまも、研究者であることと一人の人間であることとの両立の路を模索している。その答えはまだ出ない。しかし、どのような形であれ、研究者としての自分と人間としての自分との乖離に悩みつづけることこそが、一つの答えではないかと思い始めている。戦争や飢饉という問題をテーマとして扱う研究は、無累の犠牲者の上に成り立っているということ。そして、我々は、それによって生活の糧を得ているということを忘れてはならない。二つの自分に分裂しそうな感覚、葛藤を抱えながらも、研究というものは、そのような不安定な均衡の上に成り立っていることを自覚しつづけること、葛藤しつづけること、割り切らないこと。これもまた一つの答えではないかと思いはじめている。